

## ペスタロツチー教育賞 受賞者紹介

社会福祉法人

### 広島新生学園

広島新生学園の歴史は、1945年被爆直後より、島で戦災孤児保護の活動に尽力していた上栗と登氏（1919～1995）が、自己資金2000円をも6人に用品の旧陸軍兵舎の一部を借り受け、1引の保母たちとともに、原爆孤児、戦災孤児へ。揚孤児たちの収容施設を創設したことに始まり、同年12月、経営主体を戦災援護会広島県（旧（広島県同胞援護財団））におき、市内草津家跡軍人母子寮（1946～47）、基町の旧陸軍野砲隊跡地（1947～71）で、上栗氏の情熱的献身的努力によって事業が継続された。

当初受け入れたフィリピンからの引揚児童で、220人は全員がマラリヤ、チフス、栄養失調等で死んだ。頼登氏は病児を日赤病院に背負って行つてそれ者を連れ帰り、茶毬に付す毎日であった。これらの遺骨は今も学園内の納骨堂に安置される。つづいて多くの浮浪戦災孤児たちが收容されたが、子どもたちは家族を捜し求めや逃め、またすさんだ心が施設の生活になじめずや亡を繰り返した。職員たちは連日、市内の駅や繁華街で子どもたちを探し、連れ戻すというが聞を続けたが、頼登氏は逃亡する子どもたちを施設の貴重な毛布などの物資を持ち出すこと、承認し、「2枚持ち出せばそれを闇市で売つてに毎日は暮らせる、ひもじさから盗みをする前た保護しよう」と職員たちに語っていた。孤児と併に何度も裏切られながら、彼らを「天使」、呼び、なおも愛を失うことがなかつた氏の姿は児童まさに革命戦争後のスイス、シュタットで孤児をともに苦闘したペスタロツチーと重なるところ。ペスタロツチーもまた「怠けや気ままに生活やあらゆる粗野」に慣れきつた孤児たちを裏切られながら「私は彼らとともに泣き、彼らとともに笑い…彼らのスープは私のスープであり、彼らの飲み物は私の飲み物」「私には何も起きる、ただ子どもたちがいる」という精神にい

、その後頼登氏の改善され、このであった。よぎる改善された。卒園生の困難な状況はいたゞき、表れてきた。議員の幾多の努力成果も、社会の高度化した貢献するという波及してくる。私たち60年代以降になるるるによる家庭崩壊社会も歪みが学園にももたらされた入園が進し、1つもあって、ギャンブルでは、深い傷によれりにされた子どもたちに代する。さらに現在までいる。この置きゆゑに、「虐待」によると献身、大人にのでもたちが多く保護され、苦心は依然としてともたちに対する愛、以来、養護しながら子ども子どもの心を開く、浮浪児600人、子どもたはない。事業開始より島市西条町に移り、引揚孤児約200人、東広島市西条町で児童養護のことは児及び一般養護90名で児童は、1971年現在875㎡の敷地に戦災園会法人となる。長男哲男は学社である。施設は1971年後、頼登氏が主任保母し、児童棟、保育棟やグランド子氏を主任保母り組童ある。頼登氏の江口小学26人、中学校の児童で、頼登氏夫人和子、加えて周辺地域の職員が幼児13人、ひまわり長との校生14人を養護している。29人（富士との混合保育のうえ指導員、保母）人、（10人の子どもたちの活動）である。児童たる氏をはじめ26人の熱意に感銘し、は約子込み24時間態勢で子どもたちの「お母和子みは、1946年頼登氏追求する頼登氏に住む歳の今日まで、その精神と子供の和子」をして、また理想を受け継ぎ、職員以来として、頼登氏は、これまで現在にいたるやにあたっている。かれた子どもの細尊学園の歩みは、軸をもつて真摯な指導的な教育状況下にある。

新生、揺るぎない信念教育の原点」がで困難ねてきたものでの長年にわたるき合いツチーの精神とトクアロツチー教育積み重る。広島新生学園スタッフ対し、第8回ペスレーティング高く顕彰したい。功績に呈し、